

## 【追葬の問題】

本横穴群の発掘調査においてはどの横穴も一回の埋葬しか認められず、追葬が確認された横穴はなかった。しかし、前述のように、第20号横穴は追葬による人骨の整理を目的として掘られたと考えられており、一概に追葬の存在を否定することはできない。

第6号横穴は確認時玄室内に凝灰岩質の土砂が厚く堆積し、その中から土師器坏、刀子が出土した。また、土師器蓋と須恵器提瓶は一部が床面に触れていたが、全体は堆積土中にあり、鉄刀と鉄剣は床面上に揃って置かれていたものの、把が逆方向をむいていた。このように第6号横穴は一時埋葬だけを考えるには不自然な要素があるが、床面上に置かれた木製の椀の痕跡が埋土中に残っており、埋土の堆積中には攪乱などは考えられない。

また、第1、2、3、4、7、10号横穴では鉄刀の部品がバラされていたり、遺物が分かれて出土した。第18号横穴も玄室内部で敷石が剥がされて積み上げられたような不自然な印象があった。

このように、遺物が出土した横穴の多くに関しては不自然な点があり追葬の可能性も考えられるのだが、逆に、遺物のほとんどは床面上から出土し、遺物や人骨が整理された状況も認められない。やはり追葬の確認はできないのである。このような状況に対する解釈として、第一に追葬にあたって人骨と副葬品がほとんど外に持ち出されたことが考えられる。しかし、人骨と副葬品が全て持ち出されるということが、どの横穴でも実際に行なわれたとは考えにくい。そこで、死者の埋葬にあたって副葬品をバラバラにするような、何らかの葬送上の儀礼が存在していたことも考えられる。

前節の検討の結果、本横穴群出土遺物は年代的に比較的よくまとまっていた。この点も考慮すると、たとえ追葬が行なわれたとしても、本横穴群において何度も繰り返し追葬が行なわれた可能性は低いようである。

### 3. 「向山横穴群」内での大年寺山横穴群

で触れたように、本横穴群の周辺には多数の横穴が分布し、それぞれのまとまりによって愛宕山横穴群A、B、C地点、本横穴群、宗禅寺横穴群が確認されている。愛宕山横穴群C地点第2号横穴と、本横穴群内で最も北西に位置する横穴の間は直線距離にして50m程度にすぎない(第2図)。また、正式の調査で現在までに存在が確認された横穴や、戦前の清水東四郎氏による報告(清水:1938)から判断すると、「大窪谷地」内部及び広瀬川に面した北東斜面には、大きな間隔が開くことなく横穴が構築されていたことが考えられる。このことから、周辺の各横穴群を別々の存在ととらえるのは適切ではなく、一括した「向山横穴群」内での小単

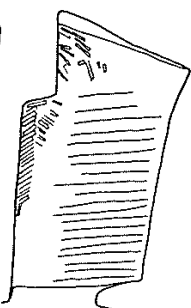
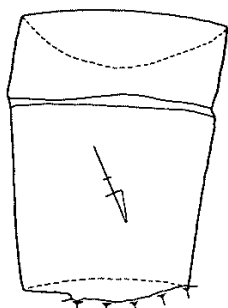
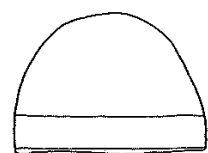
位と認識すべきであろう。さらに踏み込めば、「向山横穴群」内の各横穴を営んだ人々は、政治体制、経済活動、祭祀などの大きなまとまりにおいて、一連の行動をとっており、墓域をこの地に共有したことが考えられるのである。

「向山横穴群」周辺は古くからの住宅地であったこともあって、内部構造が判明して遺物に恵まれている横穴がほとんどなく、横穴同士の比較を困難にしている。各横穴群には様々な内部構造の横穴が混在する。その群に特徴的で、他の群には認められないものを挙げると（第 47 図）、愛宕山横穴群 A 地点にある玄室平面長方形、断面アーチ形で奥壁沿いに台床をもつもの、宗禅寺横穴群にある玄室立面切妻造り家形で 3 方向の台床をもつもの、本横穴群にある立面宝形造り整正家形のもの、同じく本横穴群にある立面宝形造り家形で奥壁沿いに台床を持つものが挙げられる。同じ「向山横穴群」内で距離的にやや離れた位置に、このような内部構造に違いをもつ横穴が偏在する興味深い現象を指摘することができる。

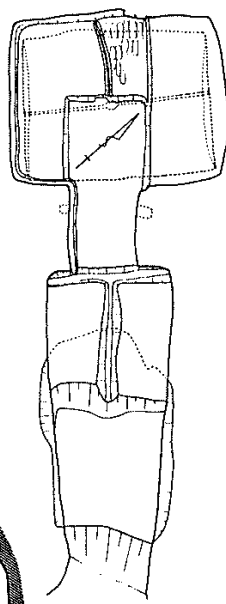
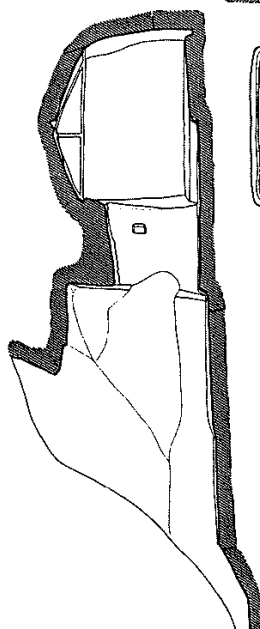
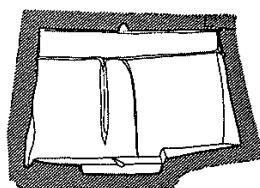
このように、特徴的な内部構造をもつ横穴が偏在する点や、本横穴群において認められたような、大型の横穴の周辺に中小の横穴がまとまる点から、「向山横穴群」の中では横穴を造り分ける何らかの規制が存在したのではないかと考えられる。

前節では、本横穴群内で横穴のまとまりが存在する現象を集団差と想定した。内部構造の差異はそれを営んだ集団の差であり、墓地を一カ所に定めて数世代造墓活動を行なったと見るのが自然である。この想定は「向山横穴群」全体から見ても、否定できる要素は見当たらないようである。積極的な根拠には乏しいものの、ここでは「向山横穴群」内で、複数の集団による墓域の占有が行なわれていたことを想定したい。そして、集団の墓地がいくつか存在することにより、結果として本横穴群が今日見るような姿となったのである。

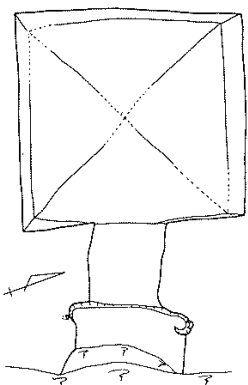
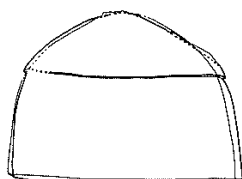
「向山横穴群」的で豊富な金属製品を出土したのは本横穴群のみである。しかし、この点のみで、本横穴群の被葬者が、他の群のそれと比較して高い地位にあったと一概に断定することはできない。本横穴群が今日まで比較的良好に副葬品を残していたと見るべきであろう。しかし、宗禅寺横穴群のように、良好に横穴が遺存していながら、土器類以外に見るべき副葬品を出土しない横穴群も存在することから、集団間に何らかの身分的な差が存在していた可能性は高い。そして、装飾横穴である第 11 号横穴の存在や、第 10 号横穴から金銅製圭頭大刀と馬具が出土したことで、本横穴群の被葬者の中になんか高い地位の人物が含まれていたとみて間違いなさであろう。しかし、そのような人物と、距離的にやや離れた「向山横穴群」内の他の横穴被葬者との関係を想定することは、良好な遺構と遺物に恵まれない現状では、困難といわざるをえない。



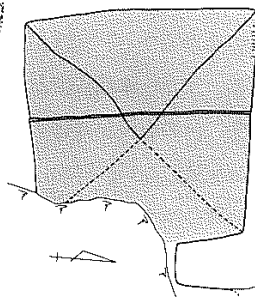
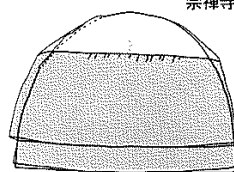
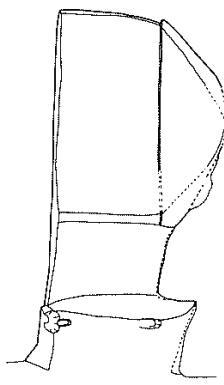
愛宕山横穴群A地点2号墳



宗禅寺横穴群8号墳



大年寺山横穴群第12号横穴



大年寺山横穴群第11号横穴

第47図 「向山横穴群」内の特徴的な横穴